

教育実践論文

運動・スポーツとのよりよい関わりを促す学習過程の工夫 — 中学校球技「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の実践研究 —

内川 梨恵子* ・ 堤 公一**

The Learning Process which Makes Students Get Involved Better
: Practical Study of Ball Game Junior High School
「Goal Group」「Net Group」「Baseball Group」

Rieko UCHIKAWA*, Kouichi TSUTSUMI**

【要約】

中学校保健体育科体育分野2年生球技「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の授業実践において、運動・スポーツとの関わりを促すことを「適応的課題解決学習」という学習過程を工夫した取り組みを行った。その具体的取り組みとして、導入の中で、動画視聴を取り入れイメージをもたせること、単元の導入段階において、その運動の面白さをイメージするために動画視聴を取り入れたり、ためしのゲームを行ったりした。さらに、振り返りを充実させるために、毎時間生じる課題や疑問点を、次時や他の単元に生かせるようにしていく。また、学んだことを次に活かすために、単元の終末段階や授業の振り返り場面において、工夫したワークシートによる学習履歴を基にした形成的評価を行った。

【キーワード】

適応的課題解決学習, 学習過程の工夫, 中学校保健体育科体育分野球技

1 問題提起

本校保健体育科では、小学校中学校連携教育の共通体育学習研究テーマである「スポーツ文化享受能力を培う体育科・保健体育科の研究」のもと、「アクティブな学びをつなげる保健体育科の授業づくり」の研究を進めてきた。「スポーツ文化享受能力」とは、「生涯を通して運動・スポーツを積極的に生活に取り入れ、人生を豊かにしていく力」のことで、アクティブな学びとは、「生徒がその運動の特性を楽しむために、個人やチームに必要な知識や技能を考え、身に付けたそれらを他の単元にもつなげていく力」のことである。

新学習指導要領における中学校保健体育科の目標では「体育の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習を通して、心と体を一体化して捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することとする(文部科学省2018:8)」とされている。また、鈴木によると、「豊かなスポーツライフの実現のためには、体育授業における運動・スポーツとの出会い方やかわり方が大切となる(鈴木秀人/山本理人/佐藤善人/長見真編著(2015))」と述べている。このようにスポーツ文化享受能力を培うためにも、運動・スポーツとの関わりをよりよくしていく体育学習が求められている。

そこで、本研究実践においては、体育授業での学習過程の工夫により、生徒とそのスポーツの関係がよりよくなることを検証した。その工夫した学習過程の手立てとして「適応的課題解決学習」という学習プロセスに取り組んだ。

*佐賀大学教育学部附属中学校

**佐賀大学大学院学校教育学研究科

2 実践目的

平成20年改訂の学習指導要領における体育科・保健体育科の成果と課題について、平成29年告示中学校学習指導要領解説保健体育編の中で、成果として、「運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力の低下に歯止めが掛かったこと、『する・みる・支える・知る』のスポーツとの多様な関わりの必要性や公正、責任、健康・安全等、態度の内容が身に付いていること」を中央教育審議会が示している。一方、課題としては「習得した知識や技能を活用して課題解決することや学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること、運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること、子供の体力について、低下傾向には歯止めが掛かっているものの、体力水準が高かった昭和60年ごろと比較すると、依然として低い状況が見られることなどの指摘がある。

（文部科学省2018：6）」とされている。このような成果と課題を反映して新学習指導要領における中学校保健体育科では、「生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、スポーツとの多様な関わり方を場面に応じて選択し、実践することができるよう『知識・技能』『思考力・判断力・表現力等』『学びに向かう人間性等』（資質・能力の三つの柱）の育成を重視する（文部科学省2018：8）」とされている。

本校保健体育科では、小学校中学校連携教育の共通体育学習研究テーマである「スポーツ文化享受能力を培う体育科・保健体育科の研究」のもと、「アクティブな学びをつなげる保健体育科の授業づくり」の研究を進めてきた。「スポーツ文化享受能力」とは、「生涯を通して運動・スポーツを積極的に生活に取り入れ、人生を豊かにしていく力」のことで、アクティブな学びとは、「生徒がその運動の特性を楽しむために、個人やチームに必要な知識や技能を考え、身に付けたそれらを他の單元にもつなげていく力」のことである。そこには、場面に応じて運動・スポーツへの関わり方で「する・見る・支える・知る」の多様な運動・スポーツへのよりよい関わり方をもって、生涯にわたって運動やスポーツに親しむことにもつながって欲しいという願いが込められている。

そのことから、学校体育の中で運動やスポーツの楽しさや喜びを味わった生徒が、生涯にわたって運動・スポーツとよりよい関わりを続けていく姿を目指し、「適応的課題解決学習（表1）」という学習過程を工夫した球技の授業実践を行い、生徒の運動・スポーツへのよりよい関わり方を促すことを目的に実践研究に取り組んだ。

3 実践内容の詳細

本研究では体育分野2年生「球技」の授業実践での分析を行った。「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」それぞれの授業で、「適応的課題解決学習（表1）」をすすめるために、単元計画の工夫、ワークシートの工夫による振り返りの充実と変化を分析した。従来のほとんどの体育実技授業では、どの單元でも最初の導入段階で、種目の特性や技術についての基本的な知識を教科書などで習得し、その後、学んだ知識や技能を練習や試合で実践し、まとめてゲームや記録測定に移す、という授業展開が多い。しかし、その学習の流れでは、個人やチームが同じ課題をもったり、できる、できないによる課題となったり、チームの中でできる子、できない子の課題に分かれてしまったりするなどの問題があった。また、課題を発見したとしても、他者やチームに伝えにくかったり、できない課題に主体的に課題解決に取り組めなかったりする環境にあることがあった。また、知識や技能について言葉や語句として習得したことを実践に生かす時に、知識と実践をつなげながら相手に分かりやすく伝えること等に課題があげられた。附属中学校でも、運動・スポーツが好きな生徒とそうでない生徒の二極化があり、そうでない生徒が主体的に活動できるよう「適応的課題解決学習（表1）」を進め、その手立てとして、単元計画の工夫、ワークシートの工夫を行った。

(1) 授業づくりの工夫

① 適応的課題解決学習について

保健体育科では、表1のような5段階からなる課題解決の学習過程を構想する。第1段階は生徒たちが「今もっている力」で運動を楽しむ段階から、工夫した力で楽しむために、「単元のゴールの姿（体育）」を設定し、課題解決のための計画を立てる。第2段階では、個人やチームで立てた計画に沿って練習し、課題解決に必要な知識・技能を身につける。第3段階では、作戦会議等協働的な学びを通して、成果を確かめる。第4段階では、これまでの成果をもとに、より自分やチームに適した計画に修正をする。第5段階では、学習ノート等で、個人やチームの振り返りの変容を見取り、次の時間の個人やチームのめあてや次の授業につなげていくようにする。そして、この一連の過程を「適応的課題解決学習」と定義づけ、生徒たちが、気づき、考え、伝え合う、のスパイラルを通して、課題解決の方法を身につけ、運動の楽しさや喜びに触れさせたい。

表1 保健体育科が考える課題解決の学習過程（適応課題解決学習）

| | | |
|--------|--|---------------------------------|
| 第1段階 ← | | 目標（単元のゴールの姿）・計画を立てる・ためしのゲーム |
| 第2段階 ← | | 計画に沿って練習する（課題解決に必要な知識・技能を身につける） |
| 第3段階 ← | | 成果を確かめる（共同・協働的な学び） |
| 第4段階 ← | | 成果をもとに計画を修正する |
| 第5段階 ← | | 振り返る |

② 保健体育科が育てたい資質・能力

単元の中で「何を学ぶか」を明確にすると同時に体育授業を通して「何をどのように学ぶのか」について、新学習指導要領をもとに、保健体育科で育てたい資質・能力について整理した。それらをもとに授業づくりを行い、生徒と教師がゴールの姿を明確に捉えながら、育てたい資質・能力を根幹に授業づくりを行うようにした（表2）。

表2 保健体育科として育成を目指す資質・能力

| 知識・技能 | 思考力・判断力・表現力等 | 学びに向かう力・人間性等 |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 運動の楽しさや楽しみ方、行い方の知識・運動を楽しむための基本的な技能（走る・跳ぶ・投げる） | <ul style="list-style-type: none"> 自己やチームの課題に気づき、その解決のための方法について伝える力（メタ認知、課題解決、課題発見、適応的学習力、コミュニケーション力） 自主的、自発的な態度で粘り強く課題に挑戦すること。 | <ul style="list-style-type: none"> 仲間を尊重し、協力することや自分の役割を果たすこと。 ルールや勝敗に対して、公正公平な態度であること。 |

③ 生徒の「主体的・対話的で深い学び」の姿

生徒が種目に興味や関心を持ち、その特性を楽しむために、自主的に取り組んだり（主体的な学び）、仲間と協働して取り組んだりする（対話的な学び）中で、自己の考えを形成し、考えを広げ深めていく（深い学び）。このような活動を繰り返しながら、運動への関わり方や課題解決に向けての取り組み方が、より自分やチームに合うものに変化していくこと（学びのスパイラル）を目指すことが、表3に示した目指す主体的・対話的で深い学びの姿であると捉える。

表3 保健体育科で期待する生徒の「主体的・対話的で深い学び」の姿とその方策

| 主体的な学び | 対話的な学び | 深い学び |
|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 生徒がその種目の特性を楽しむために、主体的に活動している。 単元の見通しをもって粘り強く取組「単元のゴールの姿」を求める過程において、自らの学習活動を振り返って、次時につなげようとしている。 | <ul style="list-style-type: none"> 仲間との協働（学び合い活動・作戦会議等）を通じて、自らの考えを広げ、深めようとしている。 | <ul style="list-style-type: none"> 今まで習得した概念や考え方を活用し、運動への関わり方や課題解決に向けた取り組みが、より自分やチームに合うものに変化している。それぞれの単元での学びが、他の単元に活かされている。 |

(2) 実践内容（中学2年生女子対象）

① 適応的課題解決学習をもちいた授業の展開

「ゴール型（サッカー）」「ネット型（バドミントン）」「ベースボール型（ソフトボール）」のそれぞれの授業において、表4のように全10時間の単元計画で授業を進めるようにした。生徒にも、導入部分での種目との出会いが、その後の活動に影響するか、考えてほしいことを伝えた。実践1では、動画視聴したことをイメージしながら、自分たちで活動を進めるようにした。基本的なルールは教師から提示し、その中でも安全面を考慮した単元計画とした。実践2では、毎時間の活動の振り返りを充実させ、勝敗を競う楽しさや喜びを味わうためにどうすればいいか、考えさせるようにした。教師のねらいとしては、チームが勝つために必要な技術や技能とは何か、考えさせるようにした。

活動は、すべてグループ活動とした。単元のゴールの姿は、サッカーでは「相手ゴールにどのようにシュートを打ち込むか。いかに自ゴールにシュートを打たせないか。特性を楽しみながら、勝つための方法を考えよう。」、バドミントンでは「空いている場所に打ち込むには、どうすればいいか。相手との駆け引きを楽しみながら、勝つための視点を考えよう。」ソフトボールでは「チームの特性を生かしながら、ソフトボールの特性を楽しもう。さらに勝つための方法を考えよう。」とした。

表4 球技の単元計画

| 導入 | | 実践1 | | | | 実践2 | | | まとめ |
|-----------|--------|---|---|---|---|--|---|---|-------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| オリエンテーション | ためのゲーム | 今もっている力で基本的な技能や仲間と連携した動きで試合を展開することができる。 | | | | 勝敗を競う楽しさや喜びを味わうために、工夫した力で基本的な技能や仲間と連携した動きで試合を展開することができる。 | | | まとめのゲーム総当たり |

② 導入の工夫

ア 動画視聴（1時間目：オリエンテーションと事前アンケート）

単元1時間目のオリエンテーションでは、プロ選手の試合の動画や練習風景などを視聴した。動画を視聴する際は、サッカーではシュートを決める場面や相手との競り合い（ボールの取り合い）場面、ファウルの場面やオフサイドの場面を視聴した。バドミントンでは、高校生の試合の様子を視聴した。男子全国高校総合体育大会の決勝で、長いラリーが続いている場面、シャトルの緩急が分かりやすい場面を視聴した。また、ゲームの進め方が分かるように視聴しながら解説を行った。ソフトボールでは、中学生の大会の様子を見ながら攻撃と守備、それぞれに視点をおいて視聴した。また、生徒の心情を読み取るために事前アンケートを実施した（図

1)。アンケートでは、「経験があるか、ないか」「どんなこと（技術や作戦）に取り組んでみたいか」「活動（授業）を行う上で不安なことや心配なことがあるか」という項目を重視した。アンケートを取る際は、生徒の気持ちが出来ただけ反映されるように動画視聴後、記入した。動画視聴の時は、好きな種目・嫌いな種目など様々な生徒がいるため、それらの気持ちも記入しやすいよう雰囲気づくりを心がけた。また、攻防の時の激しい接触プレーなどは流さないようにした。

★ 授業を行う前に、アンケートに答えてください。

1. あなたは、() を今までに行ったことがありますか？ あてはまる記号に○をつけてください。

a. 小学校の授業で経験した (年生の時) b. 小学校のクラブで経験した

c. その他 — いつ () d. どの程度に行ったことがある e. 全く行ったことがない

2. () に対する印象を自由に書いてください。

例：教科書を見たら、バスケットボールに似ているようだ。イメージがわかる。

3. あなたは、これからの学習でどんなことを身に付けたいと思いますか？ (3つまで)

ア. バスとキャッチ イ. ドリブル ウ. シュート エ. フェイント

オ. 守備 カ. 速攻 キ. ディフェンス ク. 連携プレイでの攻撃 ケ. 攻撃

コ. その他 ()

4. 分からないルールや知識、技術などがあった場合、あなたは、どうしますか？

記号に○をつけてください。(2つまで)

ア. 教科書やインターネットで調べる イ. 経験者の友達や同じ班の仲間へ聞く

ウ. 家の人へ聞く エ. 先輩（後輩）へ聞く オ. 先生へ聞く

カ. その他 ()

5. これから学習をする上で、楽しみなこと、やってみようと思うことを書いてください。

6. これから学習をする上で、不安や要望があれば、書いてください。

図1 事前アンケート

イ 導入の工夫（2時間目：ためしのゲーム）

単元2時間目では、ためしのゲームを行った。「まず、やってみよう」とい共通のめあてを設定し、今、もっている力や技能、知識でゲームを行った。単元最初の「ためしのゲーム」において、100%経験者のバドミントンでは、多くの生徒が楽しみながら活動していた。また、自分たちでルールを決めるなど工夫する姿も見られた。動画視聴したことを生かそうとしている生徒もいた。しかし、サッカー、ソフトボールでは、未経験者が多くルール理解に悩んでいる生徒が多かった。他にも、動画視聴したイメージをもっていたが、イメージ通りに実践することができず、消極的になる様子が見られた。授業の振り返りでは、うまくいかなかった点が多く挙げられた。うまくいかなかったことを次時からの課題として、その解決方法を考えるように促した。ゴールの姿には「特性を楽しむこと」「勝つためにはどうしたらいいか」という姿をかかげているので、全員が楽しむために必要なことは何か、勝つためにはどうすればいいか、についてリーダーを中心に解決方法を考えるよう促した。

ウ ワークシートの工夫（1枚ワークシート）

毎時間の振り返りを充実させるために、ワークシートを1枚にし（図6）、前時までの振り返りをみながら次の時間のめあてを考えたり、自己の成長や課題点を振り返ったりできるようにした。振り返りだけでなく、単元の見通しをもって計画的に学習を進められるよう技術レベルや到達度チェック表などもつけた。

| 振り返りシート | 個人名 | 1/23 | 1/24 | 1/25 | 1/26 | 1/27 | 1/28 | 1/29 | 1/30 | 作戦を考え |
|-----------------------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 種々の仕事に責任を果たしたり、協力できたか | | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 |
| 意欲を持って積極的に活動できたか | | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 |
| 自分にあった課題が設定できたか | | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 |
| 課題にあった練習やゲームの工夫ができたか | | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 |
| 学習資料を有効に活用し、参考にできたか | | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 |
| めあての技能は達成できたか | | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 |
| ゲームの分析ができたか | | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 |
| 技術やルールなど、知識を得ることができたか | | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 | 1・2・3 |
| 授業全体を振り返って充実度は何%? | | 75% | 100% | 100% | 100% | 100% | 100% | 100% | 100% | 100% |

図2 振り返りシート

4 授業実践と実践結果

(1) 適応的課題解決学習を用いた単元計画を用いた学習への取り組み

「ゴール型 (サッカー)」「ネット型 (バドミントン)」「ベースボール型 (ソフトボール)」のそれぞれの授業において、表4のように全10時間の単元計画で授業を進めるようにしたが、生徒の活動の様子には「経験があるか、ないか」によって差が見られた。事前アンケート (図1) の「ゴール型 (サッカー)」「ネット型 (バドミントン)」「ベースボール型 (ソフトボール)」のそれぞれの結果は、以下の通りであった (図3)。

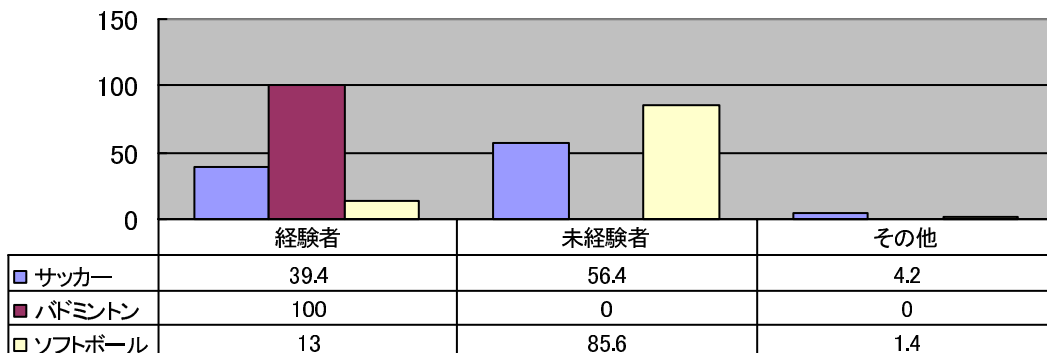


図3 事前アンケートの結果

① 「ネット型 (バドミントン)」での活動の様子

経験者が一番多く100%の生徒が経験者であった。事前アンケートの結果より「どんなこと (技術や作戦) に取り組んでみたいか」「活動 (授業) を行う上で不安なことや心配なことがあるか」という項目では、「スマッシュを決めたい。」「ラリーを続けたい。」「相手をゆさぶって勝ちたい。」などの意見が多かった (表4)。2時間目の最初に、ルール説明を行い、ためしのゲームを行った。経験があるが、基本的なルールは理解していない生徒が多かったので、安全面と基本的なルールについて指導した。その後のためしのゲームでは、多くの生徒

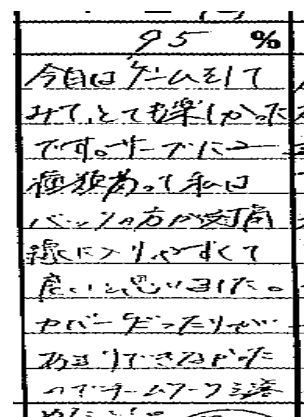


図4 生徒の振り返り

が積極的に取り組み、いろいろな相手とゲームを楽しむ様子が見られた。3時間目から、班内ゲームを行った。また、「空いている場所に打ち込むには、どうすればいいか。相手との駆け引きを楽しみながら、勝つための視点を考えよう」というゴールの姿を意識するよう指導した。「実践1（3・4・5・6時間目）」での「今もっている力で基本的な技能や仲間と連携した動きで試合を展開することができる」の段階において、多くの生徒が基本的な技能を使ってゲームを行った。特に、ヘアピンスマッシュを使う生徒が多く、自ら得点を取りにいこうとする生徒が多く見られた。ダブルスでの試合であったが、連携プレーの意識が薄く「チームワークを高めたい」という振り返りもあがった(図4)。そこで、4時間目に仲間と連携した動きで試合展開をするように前後左右の関係について指導した。その後は、自分たちのペアが前後左右のどの動きがやりやすいのか、考えながら活動している様子が見られた。2人の能力に差があるペアでも、互いの良さを話し合いながら取り組む姿が見られた。その様子は、自分たちで必要な動きや技術に気づき話し合っ

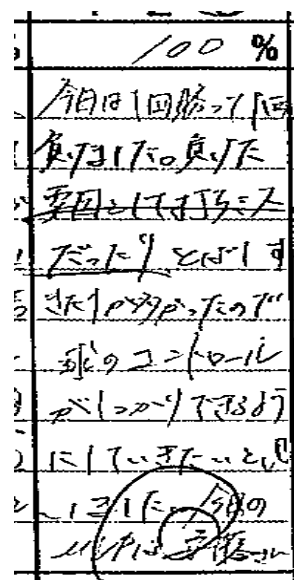


図5 生徒の振り返り

て活動を進める主体的な姿であると考えられた。7時間目からの実践2では「勝敗を競う楽しさや喜びを味わうために、工夫した力で基本的な技能や仲間と連携した動きで試合を展開することができる」のめあての元に「空いている場所に打ち込むには、どうすればいいか。相手との駆け引きを楽しみながら、勝つための視点を考えよう」というゴールの姿を意識するよう指導した。活動の前に勝つためにはどうしたらいいか、意見交換を行った。「空いているところをねらう。」「弱い場所をねらう。」「前後左右に動かす」などの意見が出された。さらに、「ダブルスの場合は、空いているところをねらうためには、どのような試合展開をすればいいのだろうか」という教師の問いに「ひたすらラリーを続ける。」「フォーメーションの作戦を考える。」などの意見が出された。その意見をもとに、自分たちのペアがどのような動きをいいか、考えながら活動するよう促した。

生徒の振り返りでは「負けた要因として、飛ばしすぎたことが多かった。」という意見があった。意見交換では出なかった「シャトルコントロール」「力加減」という新たな課題が発見されていた(図5)。授業を続けていくうちに、ゴールの姿を目指す中で自分に必要な課題を見つけ、その解決方法を模索しながら活動を進める姿は、適応的課題解決学習にであった。

② 「ベースボール型(ソフトボール)」での活動の様子

経験者が13%と一番経験者が少ない単元であった。プロ野球はテレビで見たことがあったり、好きな野球チームの応援に行ったりしたことがある生徒もいたが、実際に行ったことがある生徒は、男女合わせて13%であった。事前アンケートの結果より「どんなこと(技術や作戦)に取り組んでみたいか」という項目では、「ホームランを打ちたい。」「試合で活躍したい。」など漠然とした回答が多かった。また、「活動(授業)を行う上で不安なことや心配なことがあるか」という項目では、「ぶつかったりしてケガをしないか心配。」「ルールが分からない。」などが多くあげられた。そのことから、イメージがわいていない様子や活動に対する不安の大きさが分かる結果であった。

1時間目のオリエンテーションでは、ルールの説明を行った。実技の教科書やインターネットなどを使って楽しむために必要なルールを提示し、それらを調べてルール理解につなげた。また、

ほとんどの生徒が初めて取り組むので、道具の使い方、危険なプレーについて教師が説明した。その後、2008年北京オリンピックでのソフトボール決勝戦と中学生男子・女子の試合を動画視聴した。動画を見ている時は「カッコイイ。」「すごい。」「満塁だ。得点チャンス。」動画が終わると「早くやってみよう。」「どうやったらあんなに飛ぶのだろうか。」「投げるボールが速い。」など興奮している様子が見えた。

2時間目は、ためしのゲームを簡易ルールで行った(表5)。基本的なルールを理解してはいるが、試合がうまくできないことで、不安が残った1時間となった。その時間の振り返りでは、「初めてやってみたが、ボールをとってどこに投げればいいのか分からない。」「打ったらどうするのか、塁に出たらどうやったら次に進んで、戻るのか分からない。」といったルールに関する意見が多く出された。また、振り返シートにもほとんどの生徒が同じようなことを記入していた。

| | |
|---|--------------------------------------|
| 1 | ティーを使用したバッティングとする。空振り3回まで。ファウルはやり直す。 |
| 2 | アウトは2アウトで交代する。2アウト取れない場合は、8分で攻守交代する。 |
| 3 | アウトかセーフか分からない時は、当事者が、じゃんけんして決める。 |

3時間目からは、最初に、10分間のチームでルール確認、チーム練習の時間を経て試合をするようにした(表6)。ソフトボールでは「チームの特性を生かしながら、ソフトボールの特性を楽しもう。さらに勝つための方法を考えよう。」というゴールの姿を念頭に、チームの特性を守備面と攻撃面から考えて、どちらが得意なチームなのか考えさせるよう助言し、特性を楽しむよう指導した。その結果、アウトのとり方や得点のとり方を中心に、「ボールを捕ったらどこに投げるのか。」という守備視点と「打ったらどこに走り、塁はいくつ進めるか。点数になる時ほどのような時か。」という攻撃視点が出され、より具体的な課題発見をすることができた。それらの課題解決のために、チーム練習を充実させるようにした。話し合いの後、試合(5回までか20分間)を行い、振り返りを行った。

表6 1時間の授業の流れ

| はじめ (5分) | なか 10分 (チーム練習) | なか (試合20分) | 後片付け・ふりかえり (10分) |
|-------------|------------------|------------------|---------------------|
| めあての確認など | ・ルール確認 ・チーム練習 | ・5回までか 20分間試合 | チームでの反省 全体振り返り |

実践1の「今、もっている力で基本的な技能や仲間と連携した動きで試合を展開することができる。」というめあてのもと3時間目以降の活動では、最初の10分間のチームの時間におけるルールの確認とキャッチボールだけを行っていた。しかし、6時間目になると、勝つためにどうすればいいのか。守備面と攻撃面のそれぞれを楽しむためにどうするか、話し合いながら練習する様子が見られた。また、自分たちが楽しむための課題がチームの作戦にもつながっていた。話し合いの中で「ボールを捕ってアウトにする時に、どこに投げればダブルプレーになるのか。」という視点で話し合いを行っていた。それは、自分たちが守備に力を入れ、いかにアウトを取るか、ということを楽しむための課題であり、その解決方法を模索していることでもあった。また、ティーを使用しているため、「どの方向に向けて打てば、得点が多く取れるか。」という視点で話し合いをしているチームもあった。そのチームは、攻撃面に力を入れて多く得点をとって試合を楽しむことを目的としていた。

が速い。」「やってみたい。」など気持ちの高まりが見られた。早速、チームでゴールキーパーやフォワードなどフォーメーションを考えているチームもあった。

2時間目は、オリジナルルールでのためのゲームを行った。動画で見たような高い技術をもって活動するイメージで取り組んだ生徒も多かったが、思うようにボールコントロールができなかったり、仲間との連携がうまくいかなかったりしてもどかしさを感じる生徒が多かった。振り返りには、「楽しかった」「シュートを打てた」「意外とできた」などの振り返りもあったが、ただ「楽しかった」という振り返りの生徒の方が多かった。ルールを理解しているつもりであったが、実際に活動してみると理解できていなかった部分が多かった。

3時間目以降もオリジナルルールでゲームを進めた。単元のゴールの姿である「相手ゴールにどのようにシュートを打ち込むか。いかに自ゴールにシュートを打たせないか。特性を楽しみながら、勝つための方法を考えよう。」を意識して練習や試合を進めるよう助言しながら活動を進める中で、「シュートを打つにはゴール近くまでボールを運ばなければならない。そこまでたどりつかない。」「自分たちのゴール前に誰もいないことが多い。なぜか。」などそれぞれのチームの課題が具体的にあげられるようになった。1単位時間の流れは、ソフトボールの流れ(表5)と同じように進めた。話し合いの時間を経て練習をするうちに「どうしたらパスが通るのか」「どの場所でシュートを打てばいいのか」など考えながら練習に取り組む様子が見られた。5時間目を過ぎて、生徒たちの中から「課題をゆっくり話し合う時間がほしい」という要望があった。実践1を振り返り、チーム内でのルール理解度の差や作戦などが理解できていないことが多いという理由からであった。そのため、単元計画を表8のように変更した。活動場所は教室で、課題解決に向けて具体的な方法を話し合ったり、目標の再設定をしたりするなどの時間とした。

表8 球技の単元計画(改訂版)

| 導入 | | 実践1 | | | 6 | 実践2 | | | まとめ |
|-----------|--------|---|---|---|---------|--|---|---|-------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | 7 | 8 | 9 | 10 |
| オリエンテーション | ためのゲーム | 今もっている力で基本的な技能や仲間と連携した動きで試合を展開することができる。 | | | 課題把握の時間 | 勝敗を競う楽しさや喜びを味わうために、工夫した力で基本的な技能や仲間と連携した動きで試合を展開することができる。 | | | まとめのゲーム総当たり |

6時間目の課題把握の時間での教師のアドバイスとして「シュート」「ゴールまでボールを運ぶ」「技能を組み立てる」の3つの場面を想定し、自分たちのチームは、「どの場面が弱いのか確認」し、そこから具体的な課題を考えるよう促した。6グループ中4グループは「ゴールまでボールを運ぶ」場面が弱いと考え、ポジションを決めてボール回しを決めたり、ドリブル担当、パスカット担当など、個人の特長を活かした作戦を考えたりするグループがあった。7, 8, 9時間目は、「課題把握の時間」で話し合ったことを実践しようとする姿勢が見られた。

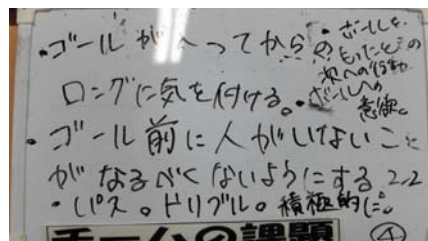


図7 チームの課題(例)

作戦がうまくいったり、課題が解決できなかつたりするグループもあったが、チーム全員で課題を解決しようとする姿勢も見られ、チームワークがよくなったと感じた。10時間目のまとめのゲームでは、技術向上の場面が見られたり、やっと作戦が成功したりするなど、成果が見られる班が多くあった。

単元の振り返りでは、ためしのゲーム後に、個人技術を身につけることや自らボールを取りに行くなど積極的にプレーすることの必要性を感じた内容が多かった。また、試合を繰り返すことで、「勝敗を競う楽しさや喜びを味わうために、基本的な技能や仲間と連携した動きで試合を展開することができる。」という目標に対して「どうしたら勝てるのか」「勝つためには何が必要なのか」考える姿勢が見られてきた。

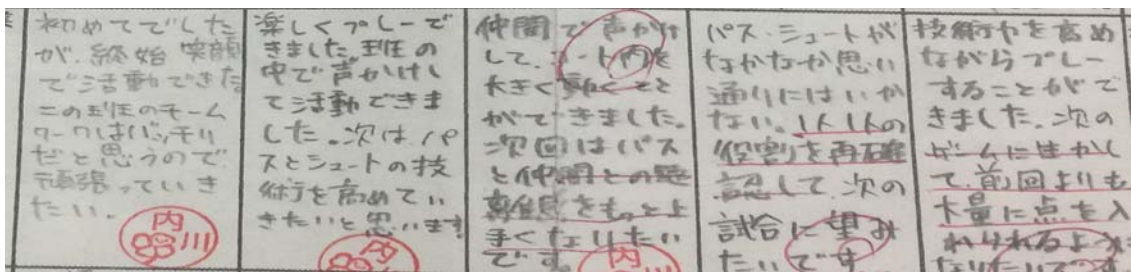


図8 サッカーにおける生徒の振り返りの変容

5 考察

(1) 「適応的課題解決学習」による取り組み

中学校保健体育科体育分野2年生球技「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の授業実践においては、それぞれの「種目の特性を楽しむ」ことをゴールの姿にして取り組んだ「適応的課題解決学習」では、種目に取り組む上で個人やチームが身につけなければならない基本的な技術習得のための課題とゴールの姿を目指すために必要な技術習得の違いが明確になった。そのことで、基本となる技術は個人やチームがゴールの姿を目指すために必要な技術なのかを考えたり話し合ったりしていくことで、具体的な課題解決方法を見出すことができた。また、課題発見、課題解決方法の実践、成果の確認を繰り返す中で、生徒が見いだす課題の質的向上にもつながった。さらに、グループでの課題解決に向けた話し合い活動を行ったり、互いにアドバイスをし合ったりして、自分たちに合った技術や課題発見、課題解決を繰り返し学習することで、その種目との関わりや、種目の特性の楽しみ方を知ることにもつながった。また、仲間と学習を進めることで、新しい視点を見つけることにつながり、スポーツとの関わりへの変化にもつながった。

(2) 導入の工夫

単元計画での2時間の導入段階の工夫として、事前アンケート、動画視聴、ためしのゲーム、を行った。事前アンケートを行い経験者、未経験者の把握をしたことは、ルールの確認をしたりオリジナルルールを作ったりして、ゴールの姿を目指す上で自分たちが達成しやすく、活動しやすい授業にすることにつながった。動画視聴では、3つの単元全てにおいて気持ちの高まりが見られ、モチベーションをあげることにつながった。全体像である試合を見ることは、ゴールの姿を見据えることにもつながり、イメージをもって意欲的に活動に入ることにつながった。ためしのゲームでは、そのイメージをもって試合をしたことで、多くの課題発見につながり、必要性のある技術や作戦について深く考えることにつながった。課題発見、課題解決の方法を考える、実践の繰り返しがより自分たちに合った技術や作戦を身にすることにつながり、さらに、個人やチームの成長や達成感を感じることにつながった。この導入段階の工夫は、「適応的課題解決学習」を進める上での有効な手立てであったと考えられる。

(3) 振り返りの工夫

3つの単元において、生徒の振り返りの変容が見られた。単元終了後に自己のワークシートを振り返り、達成感や満足感を感じた生徒が多かった。また、そのことが、次の時間の目標につながったり、今後のスポーツへの関わりにつながったりした生徒もいた。また、単元間のつながりも見えバドミントンとテニス、サッカーとハンドボールなど、単元での共通点を見出す生徒も見られた。このことは、今後の生徒のスポーツとの関わりにも影響を及ぼす効果があったと考えられる。

6 結論

本実践研究においては、体育授業での学習過程の工夫により、生徒とそのスポーツの関係がよりよくなることを検証した。特に、その工夫した学習過程の手立てとして「適応的課題解決学習」という学習プロセスを設定して実践に取り組んだ。その結果、以下のような知見が得られた。

- (1) 生徒たちは、体を動かすことが好きで、多くの運動・スポーツとかがかかわりたいと考えている。運動・スポーツとの出会いは「する・見る・支える・知る」の4つのかかわりの中で、「見る」かかわりが多く、「経験はないが、他者が行う姿を見たり、テレビで見たりしたことがあり、何となく見ていた。」という生徒が多かった。このことから、学習過程の工夫の一つ「導入段階での動画視聴」は将来のスポーツライフの実現に効果的であり、さらに、試合の進め方や技術の説明などの視点を与えながら視聴することで、運動・スポーツとの出会いを良くしていることにつながっていることが分かった。
- (2) 生徒たちは、初めて行うスポーツに対して不安が大きい。その不安を取り除くためには、学習過程において「楽しい」「もっとやってみたい」という気持ちを引き出す必要がある。正規のルールや練習方法を学ぶことに加えて、自らが必要である、と感じる技術やルールなどを考え、実践していくことでそれらの気持ちを引き出すことができることが分かった。さらに、運動・スポーツとよりよく関わるためには、その種目を深く追求することが必要であることが分かった。
- (3) 授業実践を進め中で「知識・技能」の評価において「できそう」を保障すること以上に「わかって、できる」生徒の育成にもつなげていかなければならないと感じる。今回、ルールの理解度について差があり、授業を進める上で生徒が困る部分が多かった。

今後も「適応的課題解決学習」の発展に取り組みながら、生徒が運動・スポーツとよりよく関わることを促していくことを目指していきたい。加えて、評価にも関連する「知識・技能」における「わかって、できる」生徒の育成にもつながる実践的指導力の向上や授業開発に取り組み、自己研鑽していきたい。

【引用・参考文献】

- ・今関豊一（2018）『中学校教育課程実践講座保健体育』ぎょうせい。
- ・佐賀大学教育学部附属小学校・中学校（2020）『研究紀要第5号：「主体的・対話的で深い学び」を実現する義務教育9か年間の学びの研究～資質・能力の育成方策の工夫を通して～（3年次）』。
- ・鈴木秀人／山本理人／佐藤善人／長見真編著（2015）『中学校・高校の体育授業づくり入門』学文社。
- ・文部科学省（2018）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育』東山書房。